

国家珍宝帳の書

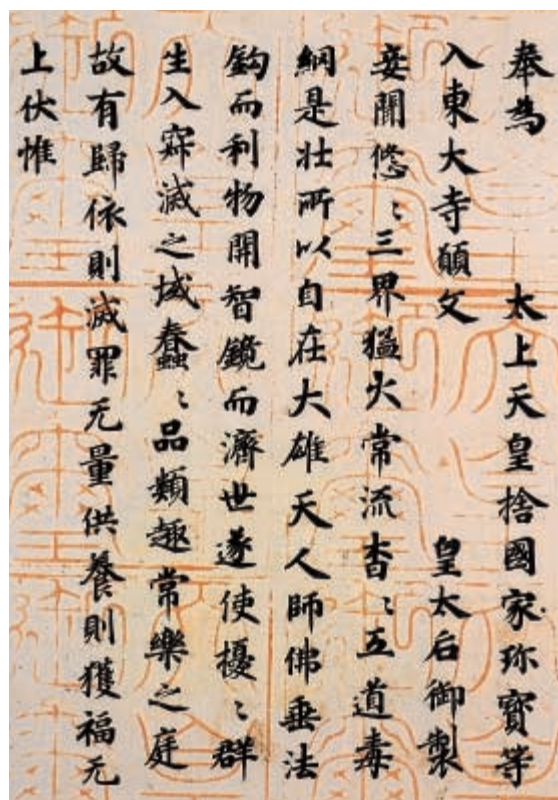
川 上 貴 子

はじめに

天平勝宝八歳(七五六)五月二日、聖武太上天皇(在位七二四―七四九)が崩御し、七七忌にあたる同年六月二十一日に、天皇遺愛の品々が東大寺盧舎那佛に献納された。天皇の冥福を祈り献納されたこれらの品は、聖武天皇の御袈裟を筆頭に、天武天皇より五代にわたって相伝された赤漆文櫛木御厨子など六百数十点におよぶ。この時の献納の主旨、品目等を記した目録が東大寺献物帳(以下献物帳とする)のうちの一卷、国家珍宝帳(挿図1)である。献物帳は他に、同じく天平勝宝八歳六月二十一日の献納目録である種々葉帳、七月二十六日の屏風花氎等帳、天平宝字二年(七五八)六月一日の大小王真跡帳、同年十月一日の藤原公真跡屏風帳があり、現在、これら五巻は正倉院北倉に伝来している。

これまで正倉院の書に関する研究はおもに、聖武天皇筆と伝える雑集(天平三年(七三一)、光明皇后筆とされる楽毅論(天平十六年(七四

四)杜家立成雜書要略、王勃詩序(慶雲四年(七〇七))が取り上げられることが多く、献物帳の書自体を対象とした先行研究は、管見の限りわずかである。⁽²⁾これは献物帳が、他の書作品と異なり、献納の際に添えられた目録であつたことが大きな理由であつたと思われる。献物帳はこれまで、その性質から、献上された宝物の由緒を知り、また献納の主体や動機、背景をうかがうべき基礎史料として重要視されてきた。しかし、献物帳の書を対象とした数少ない先行研究において杉本一樹氏は、献物帳が「聖武天皇の崩御後、東大寺盧舎那佛に宝物を献納した際の目録」という日常の文書とは異なる国家的文書であることから、その書にも初めから、国家を代表する文書にふさわしい「あるべき姿」が求められた可能性があると指摘された。具体的には、献物帳記載の品に由来する書風が選択され、献物帳に採用された可能性を述べられている。このように献物帳の書風が、何らかの意識の下に選択されたとする杉本氏の見解は、奈良朝書跡研究にあらたな視点をもち込んだといえるであろう。本稿では、この見解、すなわち国家の公的文書に採用される文字の形(本稿では以下書体とする⁽³⁾)が、意



挿図1 国家珍宝帳(巻首)天平勝宝8歳(756)正倉院

識的に選択された可能性をより高めるため、今一度、国家珍宝帳の書体に
着目し、考察してみたい。

以下、本稿第一章において先行研究の成果と問題点を整理し、第二章で
は具体的な文字の比較から、国家珍宝帳の書体を再検討する。第三章、四
章において、国家珍宝帳の核となつたと想定される書体の当時における理
解を考察し、奈良朝への伝来の可能性を定める。さらに奈良朝の唐文化受
容のあり方から、国家珍宝帳の書体が、国家最高の公的文書としての性格
を果たすために選択された可能性を考えていく。

一、国家珍宝帳の概要と先行研究の見解

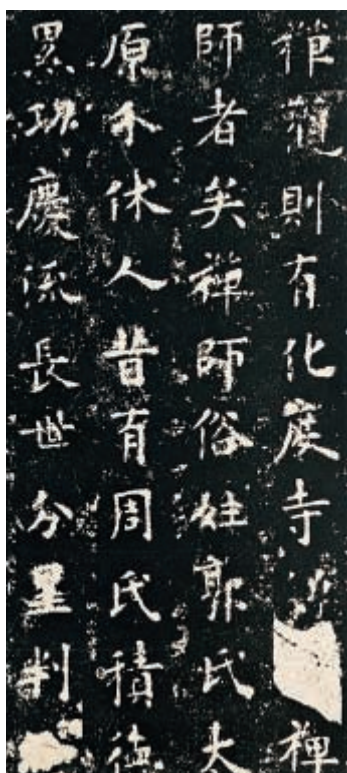
(一) 国家珍宝帳の概要

国家珍宝帳は紙本墨書であり、白麻紙と称する上質紙十八張を貼継ぐ縦
二五・八cm、横一四七四・〇cmの長大な卷子である⁽⁴⁾。標には緑麻紙がもち
いられており、「東大寺献物帳」と書された外題には、「天皇御璽」一顆が
捺されている。軸首は白檀製。巻首には「奉為 太上天皇捨国家珍宝等入
東大寺願文」と題する光明皇太后御製の願文がおかれ、続いて献納宝物の
目録が、宝物の数量、寸法、形状、特徴、材質、付属品に至るまでくわし
く記されている。さらに光明皇太后の先帝追福の意が述べられ、続いて奉
献の日付を記した後、大納言兼紫微令中衛大将藤原仲麻呂を筆頭に、左京
大夫兼侍從藤原永手、紫微少弼兼中衛少将巨萬福信、紫微大忠兼左兵衛率
賀茂角足、紫微少忠葛木戸主の位置書が記される。紙面には縦横薄墨の墨
界が施されており、書された文字の上には一辺約八・七cmもの天皇御璽が
四百八十九顆捺されている。これらの天皇御璽が、本文全面に三段ずつ整
然と捺されていること、巻首に長文の光明皇太后による願文がおかれてい
ること、また国家珍宝帳そのものが、聖武太上天皇崩御の際、その冥福を
祈り東大寺盧舎那佛に献納された宝物の目録であることから、国家珍宝帳
は単なる献納目録にとどまらない、当時における国家最高の公的文書であ
ったといえるであろう。

(二) 先行研究の見解

これまで国家珍宝帳の書については、当時第一の名筆とされていた人物によって書かれた立派な名蹟であることが述べられてきた。その書風は、中国初唐の欧陽詢（五五七～六四一）の風格を具え、特に化度寺僧邕塔碑⁽⁵⁾（以下化度寺碑とする）（挿図2）にちかいとする神田喜一郎氏の指摘⁽⁶⁾がその最も有力な説であり、通説となっている。また最近では、国家珍宝帳の書の骨格には、欧陽詢より古い要素が認められるとして、王羲之（三〇三～三六一）⁽⁷⁾七世の孫であり、王羲之風をよく伝えたと言われている隋・智永の真草千字文⁽⁷⁾（以下千字文とする）（挿図3）の書が基調となったとする杉本氏の指摘もある⁽⁸⁾。以下、この二つの説を検討してみたい。

まず国家珍宝帳の書が、化度寺碑との関係において述べられる理由は、欧陽詢の書が奈良朝において尊重されていたことによる。これは欧陽詢の真跡屏風が東大寺に奉獻され、そのことが献物帳の一つである屏風花氎等帳に記されていることからうかがえる。一方、千字文との影響関係については、国家珍宝帳の書者が、国家珍宝帳記載の王羲之搨模本二十巻のうち



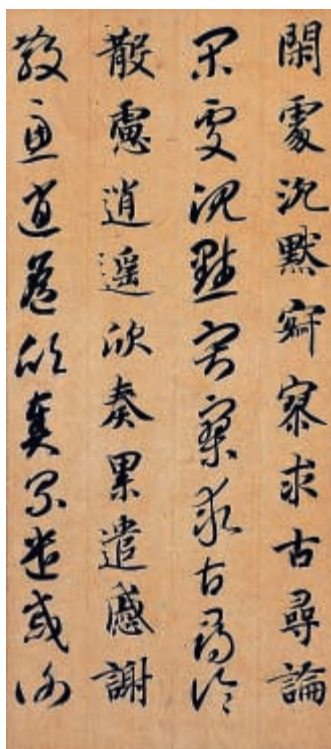
挿図2 欧陽詢「化度寺僧邕塔碑」
唐貞觀5年（631）

の一巻である智永筆千字文に直接影響を受けたとし、その書を念頭におきながら書いた可能性が指摘されている。しかし両者の説は、各々の書の宗に王羲之を指摘する点で共通している。国家珍宝帳の記述によれば、王羲之の搨模本二十巻が国家の珍宝として、光明皇太后より東大寺へ献納されていること、さらに、国家珍宝帳記載の品々が献納された二年後の献納目録である大小王真跡帳の記述に、「右書法是奕世之傳珍」とあり、大王、小王と称されていた王羲之、王献之父子の書が、天皇家に代々伝えられた貴重なものであったことが確認できる。

また、当時の歌集である「萬葉集」には次のような表記がある。

おもはじといひてしものを 不念常日手師物乎	はねずいろの 翼酢色之	うつろひやすき 変安寸	あがころかも 吾意可聞	（第六五七首）
いそのかみ 石上	ふるともあめに 零十方雨二	つつまめや 将閑哉	いちにあはむと 妹似相武登	（第六六四首）
やまとの 日本之	むろふのけももとしげくひてしものを 室原乃毛桃本繁言大王物乎	ならずはやまじ 不成不止		（第二八三四首）

傍線部のように王羲之を示す「羲之」や「大王」の文字を、能書を指す



挿図3 智永「真草千字文」隋代

「てし」「手師」と読ませていることから、王羲之の書が、当時理想の書であつたことがうかがえる。⁽⁹⁾したがって、国家珍宝帳に欧陽詢、または智永の書風が採用されたとする理由は、当時奈良朝において、王羲之の書が尊重されており、国家珍宝帳の書者が、書の第一位に王羲之の楷書を置いた結果であると考えられてきた。

以上のように、一方は欧陽詢、一方は智永と異なる見解ではあるが、国家珍宝帳の書を基本的には王羲之の流れを汲むもの（以下王羲之系統の書とする）と見なす点においては共通しているといえるであろう。しかし、実際に国家珍宝帳の書体の検討を試みると、当時理想の書として一般化していた王羲之系統の書体とは、やや異なる要素があるように感じられるのである。

そこで次に、これまで国家珍宝帳への影響が指摘されてきた王羲之系統の書である欧陽詢筆化度寺碑、智永筆千字文と国家珍宝帳とを比較し、国家珍宝帳本来の書体を確認したい。

二、国家珍宝帳の書体

挿図4の「合」「含」「有」「福」「生」の四字は各々、国家珍宝帳、千字文、化度寺碑より抽出したものである。

まず文字の概形に着目すると、化度寺碑は長方形であり、千字文、国家珍宝帳は方形に近い。具体的にその筆線の構成をみると、「合」「含」の「人」では、化度寺碑は開きが狭く、左右の払いが下方に向いていること



挿図4 書体の比較(1)

から、縦長の字形になっている。一方、千字文、国家珍宝帳の「人」の開きは広く、左右の払いもののびやかに長く書かれていることから、横への広がりを感じられる書体となっている。「有」においても化度寺碑は、一画目左払いを立て、二画目横画を短くしており、さらに「月」との間隔を広くとっていることから、その字形は長方形になっている。千字文と国家珍宝帳において、二画目横画が長く、「月」との間隔が狭いことは対照的である。「福」においても「有」と同様、化度寺碑は、偏の一画目「フ」と二画目「フ」、旁の一画目横画と「口」のように点画の間隔は広く、千字文、国家珍宝帳では狭く書かれている。さらに化度寺碑「有」の「月」、「福」の「田」に見られるように、二つの縦画部を互いに反り合わせ、内側へ引き締めるようにする筆線の構成（背勢）からは、縦方向への意識が強く感じ

られ、一方、千字文、国家珍宝帳では、外側へふくらむ筆線で構成されている（向勢）ことから、横方向への意識が感じられる書体となっている。

以上のことから、国家珍宝帳は筆線の構成において、千字文と共通性が高いといえるだろう。

しかし、字形のバランスという点に着目するならば、国家珍宝帳と千字文とは、相違がみられる。「合」の「口」、「福」の「口」、「田」を各々比較すると、千字文では、向かい合う二つの縦画部が下方へ行くにしたがい内側へ引き締まり、また「生」の最終画が短いことから、字形のバランスは不安定なものとなっている。対して、国家珍宝帳は構築的であり安定感がある。これらの相違は、千字文にみられる行書要素に起因するも

のと思われる。したがって杉本氏は、仮に千字文の行書要素を省いて謹

直にするならば、国家珍宝帳との親近性が極めて高くなることを指摘されている。しかし国家珍宝帳制作の際に、千字文が手本として実見されたと想定するならば、なぜ千字文の書体そのものが、国家珍宝帳に採用されていないのだろうか。よってそこには、千字文よりさらに国家珍宝帳に近似した別の書体が存在していたように思われるのである。

そこで、現存する作品として、盛唐末に長安の千福寺に建てられた顔真卿（七〇九～七八五）の大唐西京千福寺多宝塔感應碑（天宝十一載（七五二）（以下多宝塔碑とする）（挿図5）の書体に着目したい。多宝塔碑は顔真卿四十四歳の時に制作された、顔真卿としては初期の楷書作品であり、

現在は陝西省西安碑林博物館に移されている。碑の高さは約二三九cm、幅約一二七cmであり、一行六十六字、三十四行の文字が刻されている。碑文は楚金禅師が舍利塔を建てた経過を岑勛が撰じたものであり、その題額は徐浩の書による。この碑が建てられたのは、国家珍宝帳が奈良朝において制作さ



挿図5 顔真卿「多宝塔碑」唐天宝11載（752）



国家珍宝帳

多宝塔碑

挿図6 書体の比較（2）

れる四年前である。多宝塔碑に刻された文字と比較すると(挿図6)、方形を意識した筆線の構成、構築的な字形のみならず、各画にみられる筆線の重厚感においても、国家珍宝帳に酷似していることが確認できるのである。二つの書体の共通性は「合」「有」「福」「生」の四字だけではなく、他の文字にも認められる。挿図7は、杉本氏作成の「国家珍宝帳と真草千字文の比較(巻首)」⁽¹⁰⁾に、多宝塔碑、化度寺碑を並べたものである。⁽¹¹⁾各字を比較してみると、多宝塔碑と基本的特徴に共通点が認められる文字の多いことがわかる。

しかしながら杉本氏の指摘にもあるように、国家珍宝帳に一部、千字文に近い書体が見受けられることは否定できない。この近似性については、奈良朝における唐文化受容のあり方を考える上で重要と思われることから、今後改めて検討したい。

三、顔真卿書の評価

書体比較より、国家珍宝帳の核とされたのは、顔真卿初期の多宝塔碑にみられるような書体であったと思われる。次にその書体が、当時どのよう理解されていたのかを顔真卿の書の評価を通して考察する。

顔真卿の書は、六朝時代以来、貴族社会に受け入れられ、すでに初唐期において形骸化していた王羲之の書にかわる革新的なものとして、宋代以降評価されてきた。それは次にあげる北宋の蘇軾「書吳道子畫後」の記述からもうかがえる。

(前略) 詩至於杜子美、文至於韓退之、書至於顔魯公、畫至於吳道子、而古今之變天下之能事畢矣。(後略)

『東坡集』第二十三卷「書吳道子畫後」条

(前略) 詩は杜子美に至り、文は韓退之に至り、書は顔魯公に至り、畫は吳道子に至りて古今の變、天下の能事畢れり。(後略)

これにより蘇軾が、文学において改革を試みた杜甫と韓愈、ならびに画における吳道子とともに、書における改革者として顔真卿を位置付けていたことがわかる。先の書体比較により確認したように、国家珍宝帳と多宝塔碑の近似は明瞭である。しかしこれまでに、国家珍宝帳と顔真卿の書との関係が指摘されたことはない。なぜ唐代を代表する顔真卿の著名な書作品との、これほどの近似が見過ごされてきたのであろうか。北宋・朱長文『続書断』に次のような記述がある。

(前略) 今所傳千福寺碑、公少為武部員外時也。遒勁婉熟、已與歐虞徐沈晚筆相上下。而魯公中興以後、筆迹迴與前異者、豈非年彌高學愈精耶。(後略)

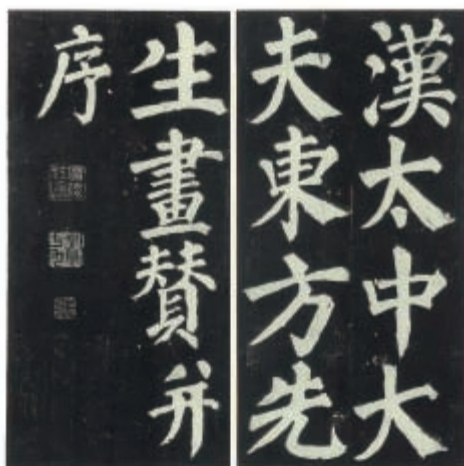
『墨池編』卷第九「續書断上・顔真卿」条

(前略) 今、伝つる所の千福寺碑は、公少くして武部員外たりし時なり。遒勁婉熟、已に欧(欧陽詢)・虞(虞世南)・徐(徐浩)・沈(沈佺期)の晩筆と相い上下す。而れども魯公、中興以後、筆迹迴かに前と異なるは、豈に年弥いよ高く学愈いよ精なるに非ずや。(後略)

千福寺碑が多宝塔碑そのものであるか否かについては、唐・張彦遠『歷代名画記』の千福寺の記述に、多宝塔碑の他、顔真卿の書による西塔院院門



挿図7 書体の比較(3) 左より「国家珍宝帳」「多宝塔碑」「真草千字文」「化度寺僧邕塔碑」



挿図8 顔真卿「東方朔画賛碑」
唐天宝13載（754）

北辺碑の存在が記されているため定かではない。しかし朱長文の記述は、中興すなわち安史の乱（七五五～七六三）以降、顔真卿が書学にさらに精通したため、その筆跡が中興以前と大きく異なっていたことを示していることから、千福寺碑が多宝塔

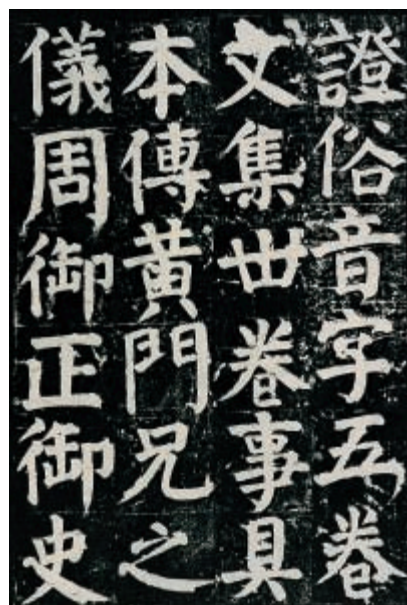
碑そのものではないとしても、千福寺碑が多宝塔碑と同じく中興以前、顔真卿が武部員外郎の時に制作された碑であるため、その書体は多宝塔碑に近似するものであったと思われる。また明代にも王世貞が、

（前略）公書如東方畫像、家廟碑咸天骨遒峻風稜射人。此帖結法尤整密、但實在藏鋒、小遠大雅不無佐史之恨耳。（後略）

（『弇州山人四部稿』卷第一三五墨刻跋「多寶佛塔碑」条）

（前略）公（顔真卿）の書は、東方画像、家廟碑みな天骨遒峻にて風稜人を射るが如し。この帖（多宝塔碑）の結法はもつとも整密なれど、但、貴きは藏鋒にあり。少しく大雅に遠く、佐史の恨み無からざるのみ。（後略）

と、東方画像（東方朔画賛碑、天宝十三載（七五四））（挿図8）、家廟碑（顔氏家廟碑、建中元年（七八〇））（挿図9）の書に比べ、多宝塔碑を「佐



挿図9 顔真卿「顔氏家廟碑」
唐建中元年（780）

史の書¹²」として
ていることか
らも、多宝塔
碑以降、筆跡
が大きく変化
したことが認
識されていた
ことがわかる。
中興以降の

顔真卿の作には、顔真卿の書法のいわゆる「顔法」が顕著に窺える。その特徴の一つが、蚕頭燕尾などと称される筆法である。蚕頭とは顔氏家廟碑中の「之」（挿図9三行下）、「史」（同四行下）の右払いの筆線に見られるように、起筆が蚕の頭のようにまるくなることであり、燕尾とは、右払いの先が燕の尾のように二つにわれる筆法である。この筆法により重厚な筆線がより強調され、結構においても「門」（同三行四字目）の向かい合う縦画を外に脹らませ向勢に構えることによって、大らかさを強調するなど、見るものに強烈な印象を与える書体となっている。現代においても、顔真卿の書という場合には通常、このような顔真卿独特の書法によって書かれたものがイメージされることから、先行研究において顔真卿の書体の国家珍宝帳への影響が指摘されてこなかった理由は、この書法によって書かれた顔真卿の書体を評価の対象としてきた、北宋以降の書道史観によるものと思われるのである。

しかしここで問題とすべきは、奈良朝において国家珍宝帳が制作された当時、すなわち唐代の評価である。唐代には多くの書論が記されている。なかでも開元、天宝期に活躍した張懷瓘は、最も多くの著作を残しており、多宝塔碑が刻された二年後に『書估』（天宝十三年（七五四））を、さらにその四年後の乾元元年（七五八）には、『書議』を記している。また寶泉も大暦四年（七六九）に書き上げた『述書賦』のなかで、乾元年間（七五八、七五九）までを対象とする、中興以前の書家について論じている。しかしこれらの書論のなかに顔真卿の記述はない。『述書賦』において、寶泉が同時代の書家を取り上げながら、顔真卿に一切言及していないことについて大野修作氏は、寶泉にとって顔真卿は近接した大きすぎる存在か、評価の定まらない存在であつたとされる⁽¹³⁾。

そこで多宝塔碑が制作された天宝年間における顔真卿の評価について、劉昫等撰『旧唐書』（後晋・九四五年）の記述に着目したい（【表1】参照）。

（前略）少時與殷寅、顔真卿、柳芳、陸據、蕭穎士、李華、邵軫、同志友善。故天寶中語曰「殷、顔、柳、陸、蕭、李、邵、趙」。以其重行義、敦交道也。（後略）

（『旧唐書』卷一八七下「文苑列伝・趙曄伝」）

（前略）少き時、殷寅・顔真卿・柳芳・陸擲・蕭穎士・李華・邵軫と志を同じくして、善を友とす、故に天寶中語りて曰く「殷・顔・柳・陸・蕭・李・邵・趙」と。其れ行義を重んじるを以て、敦く道に交わるなり。（後略）

この記述より、天宝年間（七四二～七五五）、顔真卿と志を同じくした七人の存在がうかがえる。なかでも李華（七一五～七七四）、蕭穎士（七一七～七六八）は、顔真卿と同年に進士に及第しており、先に述べた中唐における文学の改革者である韓愈らによる古文復興運動の先駆者として位置付けられる人物であることから、文中の「同志」とは、古文復興という共通の志であつたものと思われる。古文とは、六朝以後の駢文に対する先秦から漢代の文体であり、古文への回帰を提唱した文学改革運動が、古文復興運動である。この運動は、焚書坑儒により断絶した儒教思想の道統を再興しようとしたものであり、それを文学の問題としてとらえ、文体の变革を試みたものである。この意識はすでに韓愈以前の李華、蕭穎士にみられるとされる⁽¹⁴⁾。また顔氏一門にとつて、儒教の經典である經書の意義を解釈する訓詁学は家学であつた。このことから、顔氏の家学そのものが、古文復興運動の志と相通じるものであつたことがわかる。

書もこれらの動きと同様に、六朝以降、貴族社会に受け入れられてきた王羲之の典型を破るうと、篆隸にまでさかのぼる一種の革新書派が発生した。これは王羲之以前に還れという先秦への復古の精神によるものであり、それを大成したのが顔真卿であつたとされる⁽¹⁵⁾。顔氏には代々書を善くする人物が多く、特に篆籀を善くしたものが多い⁽¹⁶⁾。

先に述べた顔法とは、この篆法を基調とする直筆蔵鋒をもちいた顔真卿特有の書法である。直筆とは紙面に対して筆管を垂直に立てて書くことであり、それにより筆先の隠れる蔵鋒となる。「蚕頭」はこの蔵鋒の結果生じたものである。前述の王世貞の書論に「但貴在蔵鋒」とあり、初期の作で

ある多宝塔碑にも、すでに蔵鋒がみられるとし、王世貞はそれを貴しとしている。

天宝年間の顔真卿の現存作には、天宝十一載の多宝塔碑の他、同十三載の東方朔画賛碑が現存する。天宝十三載作の東方朔画賛碑より、顔真卿の書に変化がみられることは、前述の王世貞の記述からもうかがえるが、『旧唐書』の記述は、陸撓が天宝十三載（七五四）に没していることから、それ以前の顔真卿を述べたものである。よって、顔真卿は天宝年間、東方朔画賛碑制作以前、すでに革新派とされており、その書は復古を目指した革新的なものと認識されていたのではないだろうか。

さらに顔真卿は晩年、『干禄字書』に序を加え、碑に刻している⁽¹⁸⁾。『干禄字書』とは、その名の示すとおり「禄を干（モト）む」ための字書、つまり官吏の地位を獲得する科挙のための実用的楷書字書であり、その編纂は七一〇～七二〇年であると考えられている⁽¹⁹⁾。太宗（在位六二六～四九）は科挙実施のため、孔穎達（五七四～六四八）に撰述させた五經の注釈書の『五經正義』を顔師古（五八一～六四五）に考定させた。これが『顔氏定本』であり、その文字の基準を示したものが『顔氏字樣』である。『干禄字書』は、この『顔氏字樣』を整理したものであり、それまで排除されていた正体以外の俗字、通字も、用途にあわせて積極的に活用しようという革新的なものであった⁽²⁰⁾。この字書の普及により、六朝時代から隋・唐時代にかけて、多く存在した異体字が次第に減じたといわれるほどに、その成立は中国の文字統一、制定史上においてきわめて重要な位置にあったとされる⁽²¹⁾。『干禄字書』を著したのは、顔真卿の伯父である顔元孫（？～七一

二？）であり、また顔元孫は、『顔氏字樣』を著した顔師古の従孫でもある。このように文字学も訓詁学同様に顔氏代々の家学の一つであったことから、顔真卿が字体に精通するのは必然であり、その字体が異体字の氾濫した唐代において最も正しいとされていたことが指摘されている⁽²³⁾。

多宝塔碑は先に述べたように、北宋以降の書道史観をもつてすれば、「佐史の書」とされるなど、中興以降の書に対し、その評価は決して高いものではなかった。しかしながら、その書体は天宝年間においては復古を目指した革新的な書体であり、また顔真卿の字体は、規範として認識されていたと思われるのである。

四、顔真卿初期の書体受容

（一）勝宝度の遣唐使の動向にみる顔真卿初期の書体受容の可能性
次に、これまで述べてきた多宝塔碑にみられる顔真卿初期の書体が、実際に奈良朝に受容された可能性について、国家珍宝帳の制作時期に最も近い天平勝宝四年（七五二）に派遣された遣唐使（以下勝宝度の遣唐使とする）の目的を考慮しつつ、検討したい。

勝宝度の遣唐使は、鑑真を日本に招請したことで名高い。しかし同時にこの遣唐使が儒教・文学の師を招くという使命も帯びていたことが東野治之氏によって指摘されたことは興味深い⁽²⁴⁾。この遣唐使では、はじめて藤原氏出身の貴族が大使として起用されており、さらにそれまでの遣唐使は、副使が一人であったにもかかわらず、勝宝度では、すでに入唐経験のある

表1 略年表

西暦	中 国（年号・作品）	事 項（中国・日本）	日 本（年号・作品）
710	景雲 1	顔元孫により『干祿字書』が編纂される（～720）	和銅 3
717	開元 5	阿倍仲麻呂、吉備真備が遣唐留学生として入唐（養老度の遣唐使）	養老 1
720	開元 8		養老 4
721	開元 9	仲麻呂進士に及第（この年以降、727までの間）	養老 5
733	開元21	趙曄が仲麻呂に詩「送晁補闕歸日本国」を贈る	天平 5
734	開元22	顔真卿、蕭穎士、李華進士に及第	天平 6
735	開元23	吉備真備帰国	天平 7
742	天寶 1	顔真卿と同志 7 人（蕭穎士、李華、陸撓、趙曄、殷寅、柳芳、邵軫）の存在	天平14
752	天寶11	↓ 顔真卿「多宝塔碑」	天平勝宝 4
753	天寶12	12月迄に勝宝度の遣唐使入唐 正月、朝賀の儀において蕭穎士招請 8月まで長安に滞在 11月、鑑真と共に揚州を出発	天平勝宝 5
754	天寶13	↓ 顔真卿「東方朔画賛碑」 遣唐使帰国。 2月、鑑真入京 ↓ この年陸撓没 張懷瓘『書估』成立 勅により五月一日経の校訂が行われる（754～756）	天平勝宝 6
755	天寶14	安史の乱（～763）	天平勝宝 7
756	至徳 1	↓ 5月、聖武天皇崩御	天平勝宝 8
757	至徳 2		天平宝字 1
758	乾元 1	張懷瓘『書議』成立 ↓	天平宝字 2
769	大暦 4	寶泉『述書賦』本文成立	神護景雲 3
780	建中 1	顔真卿「顔氏家廟碑」	宝龜11
812	元和 7		弘仁 3
			空海「灌頂歴名」

吉備真備・大伴古麻呂の二人を副使にあてるなど、遣唐使の構成が特異であつたことがその理由とされる。真備は、天平七年に帰朝して後、正六位下を授けられ、大学助を拜命し、のちの孝謙天皇である阿部内親王に『礼記』『漢書』を講授している。⁽²⁵⁾ このことから真備は、漢学一般に造詣が深く、それゆえ唐の文人の招請という任務が課せられていたことが指摘されている。

『全唐文』に次のような記述がある。

(前略) 東倭之人、踰海来賓、舉其國俗、願師於夫子。非敢私請表聞於天子。(後略)

(『全唐文』卷三九五 劉太真「送蕭穎士赴東府序」)

(前略) 東倭の人、海をこえて来賓し、その国俗を挙りて、夫子を師とせんことを願う。敢えて私の請いにあらず、天子に表聞す。(後略)

この文は、蕭穎士の弟子の劉太真によつて作られたもので、文中の夫子とは蕭穎士のことである。東野氏によれば、この記録は東倭、すなわち日本の使節が仏教における正式な授戒者を望み、鑑真を招請したのと同様に、学問の師として蕭穎士を唐より招こうと、正式に玄宗皇帝に願ひ出たことを記しており、その時期は、蕭穎士が任官する直前の天宝十一載末から十二載初め頃の朝賀の儀であつたと推定されている。⁽²⁶⁾ この時期、朝賀の儀に参列した遣唐使とはまさに勝宝度の遣唐使であり、したがつて蕭穎士は、この時の遣唐大使である藤原清河によつて公式に招請されたと考えられる。蕭穎士が選ばれた理由として、使節が何らかの人脈を通じて蕭穎士の存在

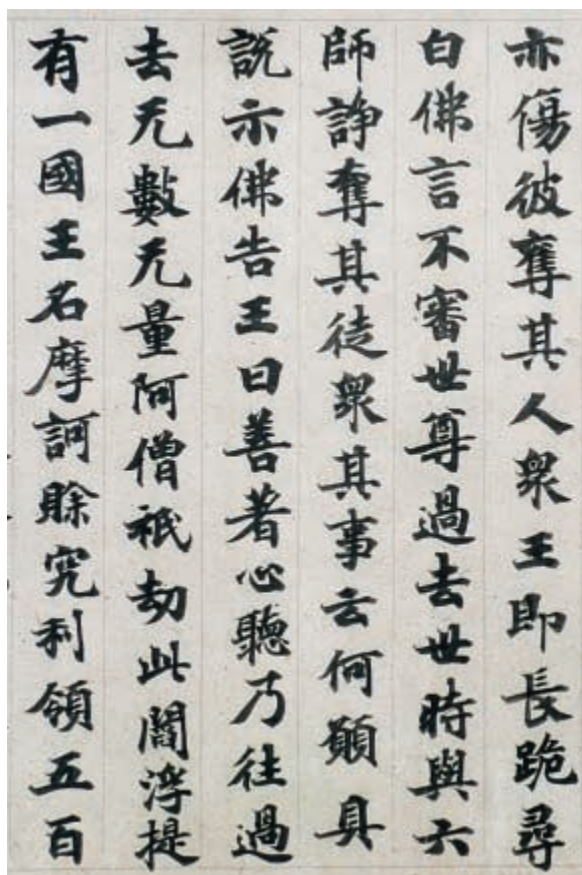
に着目したことを東野氏は指摘される。それは、真備が養老度の遣唐使(養老元年(七二七)出発)に従つて留学した際に、師やその周辺の人物を通じて蕭穎士を知つていた可能性があり、また同じく養老度の遣唐使の一人として入唐した阿倍仲麻呂(六九八―七七〇)が、蕭穎士と親交のあつた趙曄と友人であつたというものである。⁽²⁷⁾ 仲麻呂は留学生として入唐しており、この時すでに三十六年間に唐し、宮中の図書典籍を司る秘書監であつた。真備も仲麻呂とともに唐において十数年間学んでいる。このことから招請する人物を決定する際の仲麻呂の発言には大きな影響力があつたとされる。趙曄は開元二十一年(七三三)頃に仲麻呂に詩を送つて、ことから、天宝期以前より仲麻呂と交友があつたのであり、趙曄、蕭穎士は天宝年間、志を同じくし親交があつた。これらのことから仲麻呂が招請候補の一人として蕭穎士をあげることは大いにありえたとされる。同様に顔真卿も同志八人のなかの一人である。趙曄、蕭穎士が、顔真卿と交友があつたことを考慮すれば、仲麻呂自身が蕭穎士と同じく、趙曄の友人である顔真卿を直接間接に知つていたことも十分に考えられることから、顔真卿の書が、仲麻呂を仲介として使節によつてもたらされた可能性もあつたのではないだろうか。

(二) 奈良朝における顔真卿初期の書体

先の書体比較において、国家珍宝帳と多宝塔碑との間に、共通性が認められることを確認した。しかし、多宝塔碑の書体と類似性を持つ書を調査すると国家珍宝帳が唯一の存在ではないことがわかる。奈良朝において、



挿図11 左「大聖武」右「多宝塔碑」



挿図10 大聖武 8世紀 兵庫・白鶴美術館



挿図12 大聖武「功」



挿図13 大聖武「白」

最も著名な写経である大字賢愚経、通称大聖武（挿図10）がそれである（挿図11）。大聖武は、使用されている料紙が特殊で、文字の大きさが破格であることから、奈良朝写経のなかでも特異な存在とされてきた写経であるが、これまでその著名さにもかかわらず、請求されたものであるのか、奈良朝において制作されたものであるのかの判別さえも明らかにされてはいなかった。しかし近年、大聖武に使用された料紙が、日本で生産されたものであることが料紙研究の立場から報告されたことにより、大聖武は請求経ではなく、和経であることが明らかとなった。そこで興味深いのは、大聖武の多くの文字に、二度書きが確認できることである。それは例えば「功」（挿図12）では旁「刀」の転折部分に、「白」（挿図13）ではすべての点画に認められる。この二度書きはみな、筆線を太くし、字形を整えるためになされていることがわかる。大聖武は、通常の奈良朝写経にみられる一行一七字詰の確立した書式の写経ではなく、一行九字から十三字詰の大字写

経である。大聖武の底本も大字写経であつたことが指摘されていること(30)から、大聖武にみられる二度書きは、底本である大字賢愚経の文字の形を忠実に再現するという意識の下になされたものと思われる。しかも、字句の校正が厳密に行われる奈良朝写経としては、經典内容に欠落部分がみられること(31)、さらにこれ以降、奈良朝写経所では、大聖武風の大字写経が盛んに制作されるようになることから、大聖武は「賢愚経」としての經典内容以上に、その書体の価値によって受容された写経であつたものと思われる(32)。大聖武の底本となつた大字賢愚経の書体も同様に、多宝塔碑と共通性の高い書体であつたことが想定でき、奈良朝写経所においても、その書体が意識的に書写されていたことがうかがえるのである。

五、書体選択の可能性

最後に、顔真卿初期にみられる書体が、国家珍宝帳の書体として選択された可能性について検討したい。国家珍宝帳が奈良朝において制作されたのは、天平勝宝八歳(七五六)であり、多宝塔碑が長安の千福寺に刻されたのは、その四年前の天宝十一載(七五二)である。天平勝宝六年(七五四)に勝宝度の遣唐使が帰国していることから、この時、唐最新の書体が奈良朝にもたらされたものと思われる。最新であることに着目すると、奈良朝において、天平勝宝七年(七五五)から九年(七五七)までを「年」とせず「歳(サイ)」としたのは、唐の玄宗皇帝が天宝三年(七四四)以来、



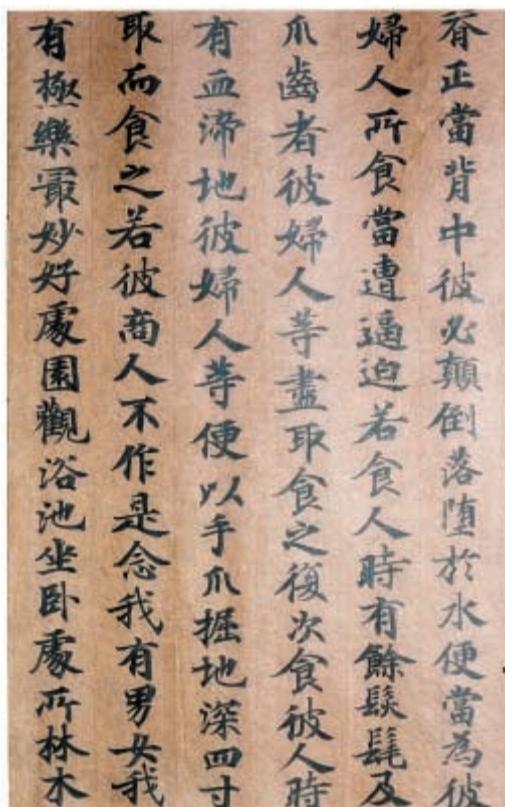
「年」を「載(サイ)」と改めたことに倣つたものであり、これが勝宝度の遣唐使帰国時の丁度翌年からなされていることは注目される。また、光明皇太后に関する事務を司る皇后宮職の名称を改めた「紫微中台」も、玄宗皇帝の「紫微省」、則天武后の「中台」に倣つたものであり、さらに、国家事業として行われた光明皇后発願一切経の五月一日経(挿図14)制作は、玄宗皇帝勅命により編纂された当時最新の經典目録により、いち早く制作された一切経であつた。このように奈良朝では、唐最新の制度や事業が短期間のうちに取り入れられていた。

ここで国家珍宝帳制作と同時期に行われた写経事業に着目したい。国家珍宝帳は、勝宝八歳、紫微中台において制作された献納目録であるが、同じく紫微中台管下の写経所では同年より、善光朱印一切経(以下朱印経とする)(挿図15)の制作が本格化している(33)。朱印経は、総国分尼寺である法華寺に施入するため、それにふさわしい最良の一切経を目指し制作された新写一切経であり、さらに近年、朱印経のテキストが五月一日経であること、朱印経と五月一日経の書者が、同一の写経生であることが山下有美氏によって指摘された(34)【表2】は五月一日経、大聖武、朱印経の書体を比較したものである。朱印経にみる「白」の重厚な転折、「告」の右上がりの横画、「歡」の偏と旁の組み合わせにみる緊密性などが特に大聖武と共通している。朱印経の書体は、大聖武の影響を受け堂々と力のこもつたものとして評価されてきたが(35)、その書体は制作の際に、五月一日経を手本としながら、大聖武風の書体へと変更されたことになる(36)。しかもこの一切経が、急ぐ性格のものであつたにもかかわらず(37)、あえて手間の掛かる構築的な大聖

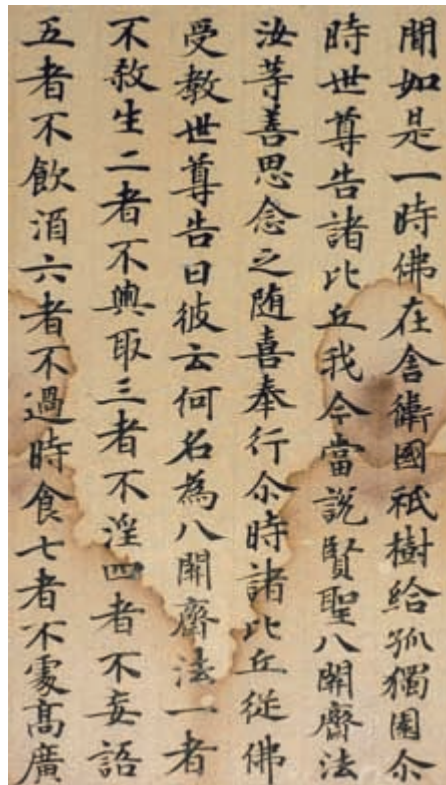
表 2

五月一日經	大聖武	善光朱印經					
言	言	言					
白	白	白	白	白	白		
不	不	不	不	不	不	不	不
有	有	有	有	有	有		
汝	汝	汝				汝	
告	告	告	舍	告	告		
歡	歡	歡	歡	歡		歡	歡

左より 《五月一日經》「増一阿含經卷第 37」奈良・東大寺 / 《大聖武》・白鶴美術館 /
《朱印經》 中臣村屋鷹取「増一阿含經卷第 36」神奈川・清浄光寺 / 一難宝郎「中阿含經卷第 9」奈良国立博物館 /
高赤麻呂「中阿含經卷第 14」京都・醍醐寺 / 丈部浜足「中阿含經卷第 34」東京・五島美術館 /
岡大津「中阿含經卷第 21」断簡 Sylvan Barnet and William Burto Collection /
科野虫麻呂「増一阿含經卷第 50」奈良・薬師寺 / 三嶋岡麻呂「大威徳陀羅尼經卷第 12」埼玉・普光明寺

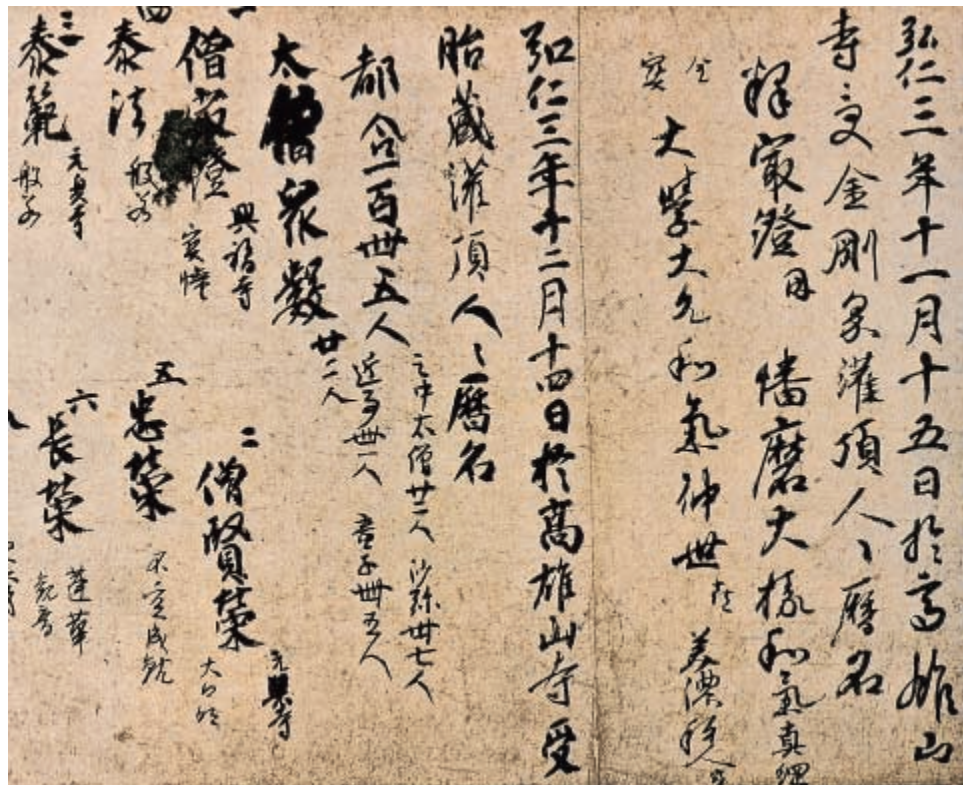


挿図15 善光朱印經「中阿含經卷第34」
天平宝字 3 年 (759) 東京・五島美術館



挿図14 五月一日經「増一阿含經卷第37」
8 世紀 奈良・東大寺

武風の書体で書写されていることから、朱印經を書き表す書体として、この書体が意識的に採用されたものと思われる。唐最新の書体は、総国分尼寺に施入するために制作された、当時における最良の新写一切經である朱



挿図16 空海「灌頂歴名」弘仁3年(812)京都・神護寺

印経にふさわしい書体として、この時採用されたのである⁽³⁸⁾。

五月一日経を朱印経のテキストとするための校訂は、請来された唐の経典により行われた。この校訂は勝宝六年の光明皇后の命によるものであり、

五月一日経を奈良朝における標準一切経とするためのものであったとされる⁽³⁹⁾。この校訂作業に必要な經典収集を命じられたのが、勝宝度の遣唐使であり、⁽⁴⁰⁾同時にこの遣唐使が、天宝年間における最新の書体を奈良朝にもたらした。さらにその字体は、『干祿字書』にもとづく規範的なものであったと思われる。

国家珍宝帳は、この朱印経と同年の天平勝宝八歳に、同じく紫微中台管下において制作された献納目録である。したがって同時期の国家事業である朱印経制作と同様、顔真卿初期の書体が唐において最新の書体であり、かつその字体に規範性をもつことから、国家最高の公的文書である国家珍宝帳にふさわしい書体として、選択されたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、国家の公的な書が、何らかの意識の下に選択されたとする杉本氏の見解をもとに国家珍宝帳の書体を考察した。筆者はまず、国家珍宝帳本来の書体を確認するために様式の検討を試みた。その結果、国家珍宝帳にみられる方形を意識した筆線の構成、構築的な字形、筆線の重厚感、これまで共通性が指摘されてきた王羲之系統の書体以上に、顔真卿初期にみられるものであったことが確認できた。次に歴史分野の先行研究の成果に基づき、勝宝度の遣唐使による顔真卿の書体受容の背景を検討し、最後に、奈良朝の国家事業における唐文化受容のあり方を通して、その書体が唐において、最新でありかつ字体に規範性をもつことから、国家珍宝帳を

記す書体として採用された可能性を提示した。

日本書道史上、顔真卿の影響が指摘されるのは、通常、空海（七七四～八三五）による灌頂歴名（弘仁三年（八一二））（挿図16）であり、奈良朝書跡における顔真卿の書体受容という観点から積極的に言及されることはほとんどない⁽⁴⁾。しかし、前述のように奈良朝において著名な存在である大聖武と同様の顔真卿初期の書体が国家珍宝帳においても確認でき、しかも大聖武は、奈良朝において書写される際に二度書きによって意識的に形成されている。また同様の書体が、同じく紫微中台管下の写経所で国家事業として制作された朱印経にも確認できることから、顔真卿初期の書体は、奈良朝書跡のなかに実質的に存在していたといえるであろう。

注

- (1) 天武天皇より持統、文武、元正、聖武、孝謙の五代。
- (2) 献物帳五巻をとりあげ各々の書に言及した文献として以下のものがあげられる。神田喜一郎「正倉院の書蹟の概観」〔正倉院事務所編『正倉院の書蹟』日本経済新聞社、一九六四年〕。杉本一樹「献物帳の書―奈良時代の書に関する一考察―」〔同著『日本古代文書の研究』吉川弘文館、二〇〇一年〕。
- (3) 「書体」という言葉は、一般に「楷書」「行書」といった、字体を基礎に文字を表現する様式、特徴などが一貫して形成されたものを指し、書の様式的特徴については通常「書風」という言葉がもちいられるが、本論ではあえて「文字の形」に着目し考察するため、個性の表現、書きぶり等を含む「書風」ではなく、文字の形という意味において「書体」という言葉を用いることとする。

石川九楊氏は、聖武天皇筆雑集に不自然な点画「風」のかげがまえ、「河」のさんずいなど）がみられることから、そこには手本とした書が存在し、それを聖武が写す際に、そこにみられる書きぶりを、表現の幅としてとらえたのではなく、「型」としてとらえ模していることを指摘している。石川九楊『日本書史』（名古屋大学出版会、二〇〇一年）。なお本稿中、先行研究の内容に言及する際には、その記述に従い「書風」とする。

- (4) 「国家珍宝帳解説」〔正倉院事務所編『正倉院宝物3北倉』毎日新聞社、一九九五年〕。
- (5) 唐・貞観五年（六三一）の刻。隋唐間における三階教の名僧、邕禪師を葬った舍利塔の銘文。李百薬撰、欧陽詢七十六歳の書。
- (6) 注（2）― 参照。
- (7) 真草二体の千字文。智永は千字文を八百本書き、江東の諸寺に施入したと伝えられる。国家珍宝帳に「同義之書巻第五十一 真草千字文二百三行」の記載があり、これが小川氏所蔵の「真草千字文」を指すことは通説となっているが、これが智永の真筆かまたは国家珍宝帳の記載とあり掲模本であるかについては未だ確定をみていない。本論においては、国家珍宝帳記載の千字文が掲模本であれ、真跡であれ、実際に伝来していたその書体が重要であるため、本稿においては伝とせず智永筆と記述する。
- (8) 注（2）― 参照。
- (9) 野津栄「天平時代における王羲之」〔島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第三巻 一九七〇年〕、東野治之「王羲之の手本」〔同著『正倉院文書と木簡の研究』塙書房、一九七八年〕、魚住和晃「王羲之理想」〔同著『書』と漢字―和様生成の道程』講談社、二〇〇〇年〕、春名好重「王羲之の尊重」〔同著『日本書道新史』淡交社、二〇〇一年〕他。

- (10) 注(2)―中の掲載図三〇―
- (11) 挿図には、四作品に共通する文字(部分も含む)の比較的多い国家珍宝帳の一、四、五行目を掲載した。
- (12) 中国、古代から中世にかけて、地方の州郡の長官であった刺史の属僚。
- (13) 大野修作『書論と中国文学』(研文出版、二〇〇一年)
- (14) 林田愼之助『唐代古文運動の形成過程』(『日本中國學會報』第二九集 日本中國學會、一九七六年)
- (15) 神田喜一郎『中國書道史9 唐 五代』(『書道全集第一〇巻』平凡社、一九五六年)
- (16) 杉村邦彦『顔真卿論』(中国中世史研究会編『中国中世史研究―六朝隋唐の社会と文化―』東海大学出版会、一九七六年)
- (17) 後晋・劉昫等撰『旧唐書』卷一九〇下『文苑列伝・陸扈伝』(中華書局出版、一九八三年)
- (18) 干禄字書碑は大暦九年(七七四)湖州に建碑される。
- (19) 王显『对《干禄字抄》的一点认识』(『中国語文』中国語文杂志社 一九六四年)
- (20) 西原一幸『唐代楷書字書の成立―『顔氏字樣』から『干禄字書』『五経文字』へ―』(『金城学院大学論集二三』金城学院大学論集編集委員会、一九八一年)
- (21) 杉本つとむ『漢字と干禄字書』(同著『漢字入門―『干禄字書』とその考察―』早稲田大学出版部、一九七七年)
- (22) 顔之推『顔氏家訓』『勉学篇第八』
- (23) 飯島太千雄『試論―顔書の実像』(同著『顔真卿大字典』東京美術、一九八五年)
- (24) 東野治之『唐の文人蕭穎士の招請』(同著『遣唐使と正倉院』岩波書店、一九九二年)
- (25) 『続日本紀第三三(宝龜六年十月壬戌)』
- (26) 東野氏は蕭穎士の招請時期を「洛京に参謀」となり東府へ赴く少し前であるとみる。その理由として『新唐書』『蕭穎士伝』より、李林甫の死後(天宝一一載十一月乙卯(十二日)没)、再び任官して河南府参軍事となつてゐることから、蕭穎士の任官は天宝十二載春ごろであり、劉太真の序中にみられる「草春新碧」の表現に着目すれば、陰曆二丁三月頃のことであつたとする。よつて、蕭穎士が再び任官する直前である天宝十一載末から十二載初めごろに日本使節の招請をうけたことを指摘している。注(24)参照。
- (27) 杉本直治郎『阿倍仲麻呂伝研究』(育芳社、一九四〇年)開元二十一年(七三三)頃、趙曄が一旦帰国を決意した仲麻呂に「送晁補闕歸日本国」と題する詩を贈つてゐることから、仲麻呂は趙曄と親交があつたとされる。
- (28) 大聖武は、北魏時代(四四五年)に漢訳された譬喻經典の一つ『賢愚經』を書写したものである。現在は「東大寺本」一巻、「東京国立博物館本」一巻、「前田育徳会本」三巻、「白鶴美術館本」二巻の四件が国宝となつてゐる他、一、二行乃至数行ずつの断簡が数多く残されている。大聖武という呼称は、その文字が当時の写経の文字に比べ、破格の大きさであり、また文字そのものの書体に独特の力強さと風格をもつことから、聖武天皇の宸翰とされてきたことによる。法量は縦二七、五cm、横一一〇五、〇cm(白鶴美術館蔵甲巻)なお、作品調査の際には、白鶴美術館の山中理氏に御配慮いただいた。
- (29) 穴倉佐敏『科学の眼で見た奈良朝古経料紙』(『水莖』第二八号 古筆学研究所、二〇〇〇年)、森香代子『修理報告2 称讃浄土仏損受経』(『修復』第六号岡墨光堂、二〇〇〇年)、寿岳文章『日本の紙』(吉川弘文館、

一九六八年）宍倉佐敏氏、森香代子氏による料紙繊維の観察結果によって、大聖武にマユミ紙が使用されたことが確認された。マユミ紙は『正倉院文書』の記述により、天平期に抄造されたことが寿岳文章氏により指摘されている。宍倉氏は、大聖武にマユミ紙が用いられたことについて、天平期、国家事業としての写経事業が拡大され、写経料紙の需要が激増したため、その不足を補うために各種の植物繊維による紙の抄造が試みられたことの裏付けであることを指摘している。

- (30) 樋口秀雄「大字写経の系譜―大聖武論―」(『東京国立博物館美術誌ミュージアム』第一一三号 一九六〇年)。白鶴美術館蔵の一卷に二十四字(二行分)の欠落がみられることから、大聖武の底本も大聖武同様の一行十二字前後の大字写経であったことが指摘されている。

(31) (注30) 参照。

- (32) これについてはすでに、拙稿「奈良朝における大聖武の受容意図」(『デアルテ』第一七号 九州藝術学会編集 西日本文化協会、二〇〇一年)において述べた。

- (33) 山下有美「嶋院における勘経と写経」(正倉院文書研究会編『正倉院文書研究7』吉川弘文館、二〇〇一年)なお挿図14「増一阿含経巻第37」は、東大寺図書館・横内裕人氏、挿図15「中阿含経巻34」は、五島美術館・名児耶明氏に調査の際、御配慮いただいた。

(34) (注33) 参照。

- (35) 『奈良朝寫経』「各個解題」首楞嚴經(奈良国立博物館、一九八三年)

- (36) 拙稿「奈良時代後期における大字写経の研究―善光朱印経を中心として―」(『鹿島美術研究(年報第二二号別冊)』鹿島美術財団、二〇〇四年)

(37) (注33) 参照。

(38) (注36) 参照。

(39) (注33) 参照。

- (40) 大平聡「天平勝宝六年の遣唐使と五月一日経」(『日本律令制論集』上 一九九三年、吉川弘文館)

- (41) 角井博「賢愚経(大聖武)小考」(『東京国立博物館美術誌ミュージアム』第一六三号 一九六四年) 奈良朝写経の「大字妙法蓮華経」については、その書風が多宝塔碑と一脈通じるという角井氏の指摘がある。

なお、本稿掲載の図版は以下の刊行物より複写させていただきました。

- 挿図1 正倉院事務所編『正倉院宝物3 北倉』(毎日新聞社、一九九五年)
挿図2 『書跡名品叢刊 欧陽詢 化度寺碑・温彦博碑』(二玄社、一九六五年)
挿図3・5 『世界美術大全集東洋編 第四巻』(小学館、一九九七年)
挿図8 『顔真卿書蹟集成』第三巻(東京美術、一九八五年)
挿図9 『顔真卿書蹟集成』第五巻(東京美術、一九八五年)

(九州大学大学院人文科学研究院哲学部門芸術学助手)